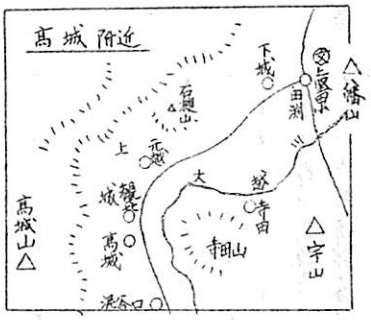

村の背後にあつて、ここから登山すればいいものを、わざわざ高城の川向から登山道が出来ている。

登れば高城を足下に見下し、いざ鎌倉と云う時は、居館に連絡するには叫ぶもよし、手まねでもよしと云つた地形。山上には東西十五、六米、南北八、九米の平地があり、虚空蔵菩薩をお祀りしてある。菩薩は蓮華の座にすわり、頭には五仏宝冠を載き、右手は印を結び、左手に如意宝珠を持たれ、静かに何かを思索するようにうつむきかげんの姿勢である。円満なお顔はほれぼれするような好男子の菩薩である。この仏の智恵は広大無辺、また無量の功徳を蔵すること虚空の如しと云う意味から名づけた菩薩であると云う。大日如来の福智の二徳を本願としているため、信ずれば罪障を消滅し、福徳智恵を得る事が出来ると云う、まことに有難い仏様である。今でも入学試験の頃になると智恵もらいに参詣する信者もあるとか。何時代に祀られたか不明である。

話は横道に入つたが、この山を見張所として展望すればすばらしい眺めである。正面は佐伯湾を望み、堅田平野の大部分を眼下に見おろす。本城前の物見台としてはこれ又最適の山である。

次は石槌山、高さ約二〇〇米、新熊野神社の横に登山口がある。急坂で一気に頂上まで登れる。石槌講の人達によつて、四国の石槌神社が祀られている。この地も亦展望のきくところである。

この四か所と居館とは互に指顧の内にあり、道は居館より最短距離によつて結ばれ、どの山々も連絡を取り乍ら、一体となつて見張りの出来る好條件にある。

更に居館背後の高城山に登らんか、南部一円の山々谷々は一望の内にあり、はるかに豊後水道をへだてて四国の山々が望まれる。

居館に居ながらにして四か所の見張所が見え、其の上高城山を背負い、二つの出城を持つという二重三重の構えは、先ず完璧の要塞と言えよう。以上のことから考えても、高城は佐伯氏居館の地と云えるのではあるまいか。

私は更に、弘安図田帳、佐伯大神氏系図等で裏付けをしてみたいと思つている。

（おわり）

民俗記録

井戸掘りの元祖 久井半治郎

会員 池田四作

古老の話によれば、私共の村地方は稲作主体の農家が多く、早魃の年などは植付にも困り、番匠川の上流土器屋から舟で水を運び、湿田に育てた苗を田に植付けたこともあり、氏神様に雨乞いのおこもりがしばしばあり、二十三夜は降らねば曇るとひと雨を待つた。旱天に曇霓を見る言葉の通り、一途に雨を待つたものである。

そこで何時の頃であつたか、村は植付けに備えて堤を作つたが、此の水を自分勝手に使用する者があつた。いわゆる我が田に水を引く欲水をして、多量の水をこつそり我が田に入れるわけである。

この悪習を根絶するためにいぶ番を設けて、堤の水の

使用を管理せしめた。

毎日使う飲水や洗濯水は、前田新平さんが掘ったという石組井戸の水を使用した。この外に、仙台庵の近くに岩を掘った井戸と、三島神社下の石垣井戸を使用していた。又五郎畑の山の中によい水が湧くので、奥水と称して飲料水に持ち帰り、保存貯蔵していた。

兎に角、蛇崎は昔から水に困っていた。そこで三光丸という帆船を持っていた肥川茅蔵さんが、愛媛県宇和島から、突抜井戸にすぐれた技術と豊かな経験を持った、久井半次郎と青木某と称する二人の若者をつれて来た。

久井半次郎は村の有志肥川弥太郎、川野伊八、池田吉蔵、肥川宇三郎等に図り、井戸掘り道具を整え、先ず肥川弥太郎、川野伊八の井戸掘りに着手して成功、昔庄屋をしていた池田基吉の井戸を掘った。之も成功したので横樋を設けて五十間の距離のある水田に池田庄太郎さんは水を引いたが、落差がなく圧力の不足が為に、満足する程の水は流れなかった。しかし前記の池田基吉の井戸は、飲料水として今でも愛用されている。

池田長太郎さんの水田には本格的の井戸を掘り、井水が湧く永通りの井戸である。孫の不二男さんが農業の改善に努力しているので、水田は稲もよく稔り、裏作も水利の便を得て見事な出来である。

部落共同で渡り口に掘った井戸も成功したので、周辺の家では炊事場に各戸共井戸を掘ったので、渡り口の井戸は蛙がいっぱい飛びこんでいて村人から敬遠され、現在は淋しい姿を残している。

川野伊八の井戸は、番匠川改修工事により、今は堤防の下に埋没して姿も消えてしまった。

久井半治郎の指導により、飲料水や灌漑用水の不足に苦しんでいた蛇崎部落には、有志数名が率先しての井戸掘り組が出来た。それは川野永吉、池田一治、池田幸助、池田菊四郎、肥川素吉、広瀬庄太郎、池田照吉といった面々であった。

この井戸掘組は川原（かわら）、津志河内、難にまで進出して、次々と井戸を掘り、近郷近在に完成した井戸の数は、上堅田、鶴岡、下堅田、水立、佐伯町などで凡そ二万にも上るであろう。

然し、沢山の井戸の中には、塩分の多い水が湧くのもあったようである。

私共が小学校に通っていた当時、道の両側の水田には灌漑用の井戸水が、音をたてて吹き出ていた。盛夏の頃は先を争って水を委んだものである。肥川道男が上種にいたずらをして、川原（かわばら）の戸篠柳太郎さんに叱られたり、井戸の周囲に茨（いばら）が張りまわされたことなど記憶に残っている。

さて、井戸掘りの元祖久井半治郎が死んで、今年で四十四年になる。やせて赤ら顔の小男であった。酒好きで野心もなく、頭髪は薄く赤毛であった。私の祖母が媒酌して、親戚の肥川力子という、健康で明朗な婦人と同棲していた。田植や稲の取入どきには、よく加勢に来てくれていた。

久井半治郎は、終生を井戸掘り、井戸さらえなど、井戸に精魂を傾注して蛇崎でその生涯を終った。葬儀は蛇崎の井戸掘り組合員が、組合葬としてにぎやかであった。水に恩恵を受けた蛇崎の者は、久井半治郎の記念碑、又は顕徳碑を建てたい。又毎年慣行の作祭には、感謝祭も併せ行いたい――と、私の父はこんなことをよく話していた。しかしそれも出来ぬまゝ、井戸掘り久井半治郎のことは、みんなから忘れ去られようとしている。

（住所　佐伯市城南区）